

追悼文

元会長 川井忠彦先生の思い出

東京大学生産技術研究所 都井 裕

当学会で2代目会長(昭和62年6月から平成6年6月まで)を務められた川井忠彦先生(東京大学名誉教授)が平成26年10月31日に逝去されました。筆者は、昭和49年4月から昭和54年3月までの5年間、当時六本木にあった東京大学生産技術研究所の川井研究室で大学院生として指導を受け、工学博士の学位をいただきました。先生との出会いは次のようなものでした。

学部の卒業論文で「梁理論及び有限要素法による熱変形の研究」と題するテーマに取り組んだ筆者は、有限要素法を用いることにより、それまで学んでいた紙と鉛筆による材料力学的方法では解析不能な複雑な問題を、精密に計算できることに大変な驚きと魅力を感じ

じ、当時「有限要素法の権化のような先生」と言われていた川井先生の研究室に進学しました。

入学後、初めて研究室に顔を出したとき、ちょうど研究室ゼミの最中で、連続体力学のテキストの輪講をやっており、筆者も早速、その中の1章を割り当てられました。ゼミの後、教授室に呼ばれ、先生と初めて一対一で話をさせていただきました。持参した卒論をお見せすると、「有限要素法を使いこなしているようだ」と言われ、コピーをほしいとおっしゃるので、後日お渡ししました。面談の間、先生は終始にこやかにしておられ、緊張することはありませんでした。

このようにして川井研究室での大学院生活がスタートしましたが、意外なことに、その5年間、筆者は「有限要素法」の研究を行いませんでした。当時すでに10年近く、わが国における有限要素法の先導役、旗振り役を務めてこられた先生は、有限要素法の威力とともに、その限界も感じておられ、新たなブレークスルーを模索しておられたのです。その5年間に、それは「新離散化モデル」として徐々に結実してゆくのですが、一介の新入生に、そのような展開が待ち構えていることを想像できるはずありませんでした。

川井先生の現世での研究生生活は終わりましたが、88歳で永眠される直前まで常に強固な意志と限りない情熱をもって、固体力学を中心とする計算力学分野を切り開いてこられた先生の研究者魂は、それに触れた多くの後進に受け継がれてゆくものと思います。謹んでご冥福をお祈りいたします。



(写真は東京大学在籍時の若く気力溢れる川井先生です)